

ビルマ語の結果構文とその類型論的位置づけ
— 日英語との比較から —

小野寺 潤

1. はじめに

本稿の目的は、現代ビルマ口語ヤンゴン・マンダレー方言（以下、ビルマ語とする）において結果構文（Resultative construction）として認定される言語形式を提示することである。また、語順を中心にビルマ語の言語構造を概観して日英語との比較⁽¹⁾を行うことにより、ビルマ語と日英語（および朝鮮語）との共通点および相違点を明らかにし、Washio (1997)および齊木・鷺尾 (2009) の結果構文の類型において、ビルマ語は「《アルタイ》系」に分類されることを提案する。

結果構文は近年の言語研究において非常に注目されており、日英語をはじめとする多くの言語の結果構文について数多くの研究が存在するが、ビルマ語の結果構文に関する研究は今までほとんどなされていない。影山 (2009) は、「世界諸言語の結果構文の類型化という大きなプロジェクトについては、まだほとんど手がつけられていない(影山 2009: 101)」としている。結果構文の類型化のためには、多言語にわたる広範で綿密な研究が求められている⁽²⁾。本研究は、結果構文の類型化をめざす研究プロジェクトの一環として、日英語との比較においてビルマ語の結果構文を分析する試みである。

2. ビルマ語の構造の概観および日英語との比較

ここでは、藪 (1992, 2009)、岡野 (2007) および角田 (2009) に基づいて、ビルマ語の系統や使用状況を概観し、ビルマ語と日英語（および一部朝鮮語）の言語構造の比較を行う。

ビルマ語 (Burmese, Myanmar; *myāma baḍa, bāma zāga*) は主にミャンマー連邦共和国 (The Republic of the Union of Myanmar) において用いられる言語である。使用人口は 2004 年のミャンマー政府統計年鑑によれば約 5322 万人で⁽³⁾、そのうち母語話者は 80%弱とされている (藪 2009: 178)。系統的には、ビルマ語はチベット語 (Tibetan) などとともにシナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) に属し、主に中華人民共和国の雲南省で使用される彝語 (Yi languages) などとともにロロ・ビルマ語群 (Lolo-Burmese) を構成している。ビルマ語の諸方言のうち、本稿で考察の対象とするヤンゴン・マンダレー方言が放送や教育などに広く用いられており、ビルマ語以外の言語を母語とする少数民族も含め、ミャンマー連邦共和国国内において共通語の役割を果たしてい

る。そのほか、国内各地にビルマ語の有力な方言がいくつかある。

ビルマ語と日本語の系統的関係は全く立証されておらず、両言語の使用地域は地理的に大きく隔たっている。それにもかかわらず、この二つの言語は多くの点で共通・類似した特徴を持っており、言語類型論的には非常に近い言語であると言える。

2.1. 品詞

ビルマ語の品詞は、自立語である名詞類 (N) と動詞類 (V)、そして付属語である助詞類 (P) の三つの範疇におおまかに分類できる (藪 1992)。ビルマ語では、いわゆる動詞と形容詞の違いを形式的に区別することはできないため、たとえば日英語においては形容詞に分類される語に相当するビルマ語も、この分類では動詞類 (V) という範疇に分類される。

2.2. 語順と格標示

ビルマ語の基本語順 (Basic word order) は SOV であり、名詞とともに後置詞を用いて格標示を行う。この点でビルマ語は日本語と同様であり、英語とは異なる。

(1) ビルマ語・日本語・英語の基本語順

- | | | | | |
|----|------------|-----------|-----------|-------|
| a. | ko win-ga. | pan̄i:-go | sa:-deɪ | 【SOV】 |
| | Ko Win-NOM | apple-ACC | eat-IND | |
| b. | コー・ウィンが | リンゴを | 食べた。 | 【SOV】 |
| c. | Ko Win | ate | an apple. | 【SVO】 |

ビルマ語は、述語句となる名詞句または動詞句が文末に置かれ、修飾語句が被修飾語句の前に、従属節が主節の前に来る。また、名詞類や動詞類のあとに助詞類が付加して、格標示を行ったりさまざまな文法関係を表したりする (藪 2009: 178)。この点で、ビルマ語は日本語との顕著な類似性を持っている。

- | | | | | | | |
|-----|------|-----|--------|----------|-----------|--------------|
| (2) | di | ne. | ze: | θwa:-yin | māne.ga. | ðādin:za-hma |
| | this | day | market | go-IF | yesterday | newspaper-IN |

twe.-de. le?swhē:ʔeiʔ-ko wɛ-gɛ.-mɛl
 find-REL handbag-ACC buy-MOVE-SUB

《今日、市場へ行ったら、昨日新聞で見た手提げ鞆を買ってきます。》(藪 2009: 178)

角田 (2009: 280-306) は、130 の言語の語順の概略を示している。ここで、形容詞と名詞の語順⁽⁴⁾に関しては、ビルマ語と日本語の語順は全く同じではない可能性が示されている⁽⁵⁾。これは、ビルマ語の動詞類 (V) が名詞類 (N) を限定修飾するとき、一見すると、「A-N」の語順となる日英語の限定的名詞修飾と同様に「V-N」の語順になる場合と、「N-V」の語順になる場合の二通りがあるためであると思われる。

(3) 日英語の限定的名詞修飾

- a. よい本 【A-N】
- b. a good book 【A-N】

(4) ビルマ語の限定的名詞修飾

- a. kaun:-de. saʔou? 【V-N】《よい+本→よい本》
 good-REL book
- b. saʔou? ʔā-kaun: 【N-V】《本+よいもの→本でよいもの→よい本》
 book NOM.AFF-good
- c. saʔou? kaun:-gaun: 【N-VV】《本+よいもの→本でよいもの→よい本》
 book good-good

しかし、「N-V」(または「N-VV」)になる場合は、名詞類 (N) に後行する動詞類 (V) が名詞化している⁽⁶⁾ため、先行する名詞類と後続する名詞化した動詞類は同格になっているとみなすことができる。このように考えれば、(3a, b) に示された日英語の限定的名詞修飾の例と (4b, c) に示されたビルマ語の限定的名詞修飾の例は厳密には対応していない。それゆえ (3a, b) と (4a) だけを見れば、日本語とビルマ語は基本語順に加えて形容詞 (ビルマ語では動詞類 (V)) と名詞の語順に関しても同様にふるまうと言える。

2.3. 否定辞の語順

(5a-c) に示すように、否定辞 (-ない) が動詞の後ろに置かれる日本語と異なり、ビルマ語では否定辞 (mă-) は動詞の前に置かれる。さらに、文末に補助否定辞 (-bu:/-phu:) が付加する。朝鮮語では否定辞 (an-) は動詞の前に置かれる。この点ではビルマ語は朝鮮語に類似している。

- (5) a. 食べない 【日本語】
 b. mă-sa:-bu 【ビルマ語】
 NEG₁-eat-NEG₂ 《食べない》
 c. an-mo^k-[?]ta 【朝鮮語】
 NEG-eat-IND 《食べない》

2.4. 小結

以上、2 節ではビルマ語の文法構造を概観し、日英語および朝鮮語との比較を行った。その結果、ビルマ語と日本語は非常に共通点が多いが、否定辞に関しては朝鮮語との類似性が見られた。大まかに言って、日本語・ビルマ語・朝鮮語は言語類型論的に非常に近い関係にある言語であると言える。

3. 日英語の結果構文とその類型

3.1. 日英語の結果構文

英語や日本語には結果構文と呼ばれる構文がある。ここでは、影山 (2009: 101) に従い、結果構文は、基本的には「主動詞が表す行為ないし活動が原因となり、その直接的結果として生じる状態を《結果述語》として表現した単一のセンテンスである」と定義する。日英語の結果構文の例として以下のものがあげられる。

- (6) a. I painted the wall red. (鷺尾 近刊: 4) 【S-V-O-AP】
 b. 僕は壁を赤く塗った。(鷺尾 近刊: 4) 【S-O-AP-V】

(6a, b) は、「僕が壁にペンキを塗って、その結果として壁が赤くなった」ことを表している。日英語の語順の違いにより、(6a) では結果述語 AP は動詞に後行し、(6b) では結果

述語 AP は動詞に先行している。

- (7) a. John pushed the door open. (影山 2001: 171) 【S-V-O-AP】
b. ジョンはドアを押し開けた。 (影山 2001: 171) 【S-O-V₁-V₂】

(7a, b) も同様に、「ジョンが壁を押し、その結果としてドアが開いた」ことを表している。しかし、(6a) と同様に (7a) は S-V-O-AP の構造を持っているのであるが、それに対応する日本語の結果構文である (7b) では、結果述語は AP ではなく複合動詞の第 2 要素 (V₂) によって表されている。

日英語の相違に限らず、結果述語がどのような形式で表わされるかということはそれぞれの言語によって異なっており、どのような形式を結果構文として認定できるかという問題は、結果構文の類型化という研究プロジェクトにおいて大きな課題として残されている。

3.2. 結果構文の種類と類型

Washio (1997) では、S-V-O-AP タイプの結果構文を (8-10) に示す 3 種類に分けている。

- (8) Strong Resultative (強い結果構文)
a. He watered the tulips flat.
b. *彼はチューリップを平らに水撒きした。
- (9) Weak Resultative (弱い結果構文)
a. He painted the door green.
b. 彼はドアを緑に塗った。
- (10) Spurious Resultative (見せかけの結果構文)
a. He tied his tie tight/tightly.
b. 彼はネクタイを固く結んだ。

斉木・鷺尾 (2009) によれば、Strong Resultative とは「S-V-O-AP における二次述語 AP の意味内容を動詞の意味から予測することが不可能なものであり、AP が動詞の意味から完全に独立しているタイプ (斉木・鷺尾 2009: 49-50)」である。また、Weak Resultative に

関しては、「Weak Resultative に生じる AP は、動詞の意味から完全には独立していない（斉木・鷺尾 2009: 50）」としている。また、Spurious Resultative においては、AP を副詞と置き換えることができ、AP が結果状態とも行為の様態ともとれるような場合であるとしている。

このような結果構文の分類に基づいて Washio (1997)は多くの言語を分析し、結果構文の類型を提案した（以下、「Washio の類型」と呼ぶ）。以下に、斉木・鷺尾（2009）に示されている、Washio の類型をもとにした結果構文の種類と言語のグループの表を示す。

(11) Washio の類型（Washio 1997, 斉木・鷺尾 2009: 49）

	ゲルマン系 (英・独語)	《アルタイ》系 (日・朝語)	ロマンス系 (仏・伊語)
Strong Resultative	✓	*	*
Weak Resultative	✓	✓	?
Spurious Resultative	✓	✓	✓

4. ビルマ語の S-O-AP-V 結果構文とその位置づけ

前節の表（11）であげられた言語のグループのうち、英・独語を含むゲルマン語と仏・伊語を含むロマンス語は、同時に系統的な一語派でもある⁽⁷⁾。しかし、表（11）において同じく自然類をなす日・朝語は、語順や格標示の方法などにおいて著しい類似を見せ、類型論的に非常に近い関係にあるとは言えるが、両言語の系統的関係は不明である。このグループにつけられた「《アルタイ》系」という名称も、いわゆる「アルタイ語族」（“Altaic languages”）とされるモンゴル語やトルコ語がもつ「アルタイ語的特徴⁽⁸⁾」を共有することから名付けられたと考えられるが、日朝両言語の系統的関係が不明であるのと同様に、Washio の類型において「《アルタイ》系」に分類される日朝語の両方または一方が「アルタイ語族」に属するかは全く不明である。

ビルマ語はチベット・ビルマ語派に属し、日朝両言語の関係と同様に、日本語（あるいは朝鮮語）との系統的関係は不明である。しかし、語順や格標示の方法などでは日朝語に非常に類似している。日朝語と非常に似た言語的特徴を持ちながら、日朝語と系統的関係を持たない、あるいは系統的関係が不明であるビルマ語では、どのような種類の結果構文

が許されるのだろうか。以下では、Washio (1997)の結果構文の分類に基づいて日英語の S-O-AP-V タイプの結果構文を挙げ、それに対応するビルマ語の結果構文の適格性を検討する。

4.1. 他動詞ベースの Strong Resultative

Strong Resultative は主動詞の意味内容から AP の意味内容を予測することが不可能なタイプの結果構文である。ここでは、主動詞が他動詞であるタイプの日英語の Strong Resultative を示し、それに対応するビルマ語の文⁽⁹⁾をあげその適格性を見る。

- (12) a. She pinched her cheek red. (鷲尾 近刊: 2)
 b. *彼女は頬を赤くつねった。(鷲尾 近刊: 2)
 c. * θ uma.-ga. pa:-go ni-ni-le: lein-d \acute{e} l
 she-NOM cheek-ACC red-red-DIM twist-IND
 d. ^{ok} θ uma.-ga. pa:-go ni- $\acute{?}$ aun lein-d \acute{e} l
 she-NOM cheek-ACC red-UNTIL twist-IND
 《彼女は頬を赤くなるようにつねった。》
- (13) a. The horse dragged the logs smooth. (鷲尾 近刊: 2)
 b. *馬が丸太をすべすべに引きずった。(鷲尾 近刊: 2)
 c. *min:-ga. $\theta i?$ toun:-go
 horse-NOM wood-ACC
 pyaun-pyaun-le:/ch \acute{o} -ch \acute{o} -le: swe:-d \acute{e} l
 bare-bare-DIM/smooth-smooth-DIM carry-IND
 d. ^{ok}min:-ga. $\theta i?$ toun:-go swe:-lo.
 horse-NOM wood-ACC carry-AND.SO
 $\theta i?$ toun:-ga. pyaun-ch \acute{o} - θ wa:-d \acute{e} l
 wood-NOM bare-smooth-go-IND
 《馬が丸太を引きずったので、丸太がすべすべになってしまった。》

- (14) a. He watered the tulips flat. (斉木・鷺尾 2009: 49)
 b. *彼はチューリップを平らに水撒きました。(斉木・鷺尾 2009: 49)
 c. *θu-ga. culi?pan:-go pya:-pya:-le: ye-phyan-dɛl
 he-NOM tulip-ACC flat-flat-DIM water-sprinkle-IND
 d. ^{ok}θu-ga. culi?pan:-go ye-phyan-lo.
 he-NOM tulip-ACC water-sprinkle-AND.SO
 pan:-dwe. pya:-θwa:-dɛl
 flower-PL flat-go-DIM
 《彼がチューリップに水を撒いたので、花が平らになってしまった。》

- (15) a. He pulled his tie loose. (斉木・鷺尾 2009: 49)
 b. *彼はネクタイを緩く引っ張った (斉木・鷺尾 2009: 49)
 c. *θu-ga. nɛ?kātain-go chaun-chaun-le: swe:-phye-dɛl
 he-NOM necktie-ACC loose-loose-DIM pull-loosen-IND
 d. ^{ok}θu-ga. nɛ?kātain-go chaun-ʔaun swe:-phye-dɛl
 he-NOM necktie-ACC loose-UNTIL pull-loosen-IND
 《彼がネクタイを緩くなるように引っ張って緩めた。》

他動詞ベースの Strong Resultative は、(12-15a, b) に示すように英語では適格であるが日本語では不適格となる。それに対応するビルマ語の文は (12-15c) に示すとおり日本語と同様に不適格となり、(12-15a) の英語の例とほぼ同一の意味内容を表すためには (12-15d) のように複文の構造をとらざるをえない。このように、他動詞ベースの Strong Resultative に関して、日本語とビルマ語は全く同様のふるまいを見せる。

4.2. 自動詞ベースの Strong Resultative

つぎに、主動詞が自動詞である自動詞ベースの日英語の Strong Resultative を示し、それに対応するビルマ語の文の適格性を検討する。

- (16) a. She cried her eyes red.
 b. *彼女は目を赤く泣いた。

- | | | | | |
|----|-----------------------|--------------|-------------|-------------|
| c. | *θuma.-Ø | myeʔloun:-go | ni-ni-le: | ŋo-del |
| | she(-NOM) | eye-ACC | red-red-DIM | cry-IND |
| d. | ^{ok} θuma.-Ø | ŋo-lo. | myeʔloun:-Ø | ni-θwa:-deɪ |
| | she(-NOM) | cry-AND.SO | eye(-NOM) | red-go-IND |

《彼女は泣いたので目が赤くなってしまった。》

(16a) と (16b) の対比でわかるように、英語では自動詞をベースにした **Strong Resultative** が容認されるのに対し、日本語では全く不適格となる。それに対応するビルマ語の文も日本語の例と同様に不適格である。

- (17) a. Drive your engine clean. (Levin and Rappaport Hovav 1995)
- b. *エンジンを手綺麗にドライブしましょう。
- | | | | | |
|----|------------------------|---------------------------|--------------|--------------------|
| c. | *ʔinjin-go | θan.-θan.-cin:-cin:-le: | maun-bal | |
| | engine-ACC | pure-pure-clean-clean-DIM | drive-IMP | |
| d. | ^{ok} maun-yin | maun-θālauʔ | ʔinjin-Ø | θan.-cin:-θwa:-mel |
| | drive-IF | drive-AS | engine(-NOM) | pure-clean-go-SUB |

《運転すれば運転するほどエンジンはきれいになるでしょう。》

(17a-c) のそれぞれの文においても、適格性はそれぞれ (16a-c) と同様である。ほぼ同一の意味内容を表そうとすれば、(16d, 17d) のように非常に説明的な複文を用いなければならない。以上見たとおり、自動詞ベースの **Strong Resultative** に関しても、日本語とビルマ語は全く同様のふるまいを見せる。**Strong Resultative** については、その主動詞の自他に関わらず非文法的となる点で、日本語とビルマ語は完全に対応している。

4.3. Weak Resultative

Weak Resultative は、主動詞の意味内容から AP の意味内容が予測できる、あるいは主動詞の意味内容と AP の意味内容が完全には独立していない結果構文である。以下、日英語の **Weak Resultative** とそれに対応するビルマ語の文をあげる。

- (18) a. I painted the wall red. (鷺尾 近刊: 4)
 b. 僕は壁を赤く塗った。(鷺尾 近刊: 4)
 c. cǎnɔ-ga. nanyan-go ni-ni-le: θou?-lai?-tel
 I-NOM wall-ACC red-red-DIM paint-COMPLETELY-IND
- (19) a. She dyed her hair black. (鷺尾 近刊: 1)
 b. 彼女は髪を黒く染めた。(鷺尾 近刊: 1)
 c. θuma.-ga. zābin-go ne?-ne?-le: sho:-deI
 he-NOM hair-ACC black-black-DIM dye-IND

Weak Resultative に関しては、日英語ともに適格となる。それに対応するビルマ語も適格となり、日本語とビルマ語はその点で完全に対応している。

しかし、日英語の Weak Resultative に対応しているかあいまいとなる可能性があるビルマ語の形式もある。ビルマ語の助辞 ‘-go’ は、「対象」を表す格助詞である。日本語訳としては「を」と「に」の二つの助詞に対応する。岡野 (2007) は、(20) に示すようにビルマ語の二重目的語構文では「一般に直接目的語はモノで、間接目的語はヒトである。二つの目的語を持つ動詞の場合、ヒトである間接目的語に -go をつけ、直接目的語は動詞の直前に無標で現れるのが一般的である」としている。

- (20) kǎle:-dwe.-go moun.-Ø we-pe:-mel
 child-PL-DAT snack(-ACC) buy-give-IND
 《子供たちにお菓子を買い与えた。》

もう一度、Weak Resultative の別の例を見てみよう。

- (21) a. He painted the door green. (鷺尾 2009: 49)
 b. 彼はドアを緑に塗った。(鷺尾 2009: 49)
 c. θu-ga. dāga:-go āsein:-yaun-Ø θou?-lai?-tel
 he-TOP door-ACC green-color-Ø paint-COMPLETELY-IND

(21c) は一見 (21a, b) の日英語の **Weak Resultative** に対応しているように見える。しかし、この文は二通りの解釈が可能で、非常に微妙な判断ではあるが、その一つは結果構文となるがもう一方は結果構文とはならない可能性がある。(21c) には (22a, b) に示す二通りの日本語訳が考えられる。

(22) $\theta u\text{-ga. d\acute{a}ga\text{-go } \acute{a}sein\text{-:yaun-}\emptyset \theta ou\text{?}\text{-lai}\text{?}\text{-tel}$ (= 21c)

- a. 彼はドアを緑色に塗った。【結果構文？】
- b. 彼はドアに緑色を塗った。【非結果構文？】

4.4. Spurious Resultative

Spurious Resultative は AP を副詞と置き換えることができる点、また、AP が結果状態とも行為の様態ともとれる点において Strong Resultative および Weak Resultative と異なる。ここでは、日英語で Spurious Resultative となる例をあげ、対応するビルマ語文の適格性を見る。

(23) a. He tied his shoelaces tight/tightly. (鷺尾 近刊: 4)

b. 僕は靴の紐を固く結んだ。(鷺尾 近刊: 4)

c. $c\acute{a}n\text{-ga. p\acute{h}\acute{a}na\text{?}co\text{-:go tin}\text{-:tin}\text{-:le: chi}\text{-lai}\text{?}\text{-tel}$
 I-NOM shoelace-ACC tight-tight-DIM tie-COMPLETELY-IND

(24) a. He tied his tie tight/tightly.

b. 彼はネクタイを固く結んだ。

c. $\theta u\text{-ga. n\acute{e}\text{?}k\acute{a}tain\text{-go tin}\text{-:tin}\text{-:le: chi}\text{-lai}\text{?}\text{-tel}$
 he-NOM necktie-ACC tight-tight-DIM tie-COMPLETELY-IND

Spurious Resultative に関しても、日本語とビルマ語では適格となり、同様のふるまいを見せる。

4.5. 小結

以上のように、S-O-AP-V 構文においては、Strong Resultative, Weak Resultative, Spurious

Resultative のいずれにおいても、ビルマ語は日朝語と同様のふるまいを見せる。以上の事実から、Washio の類型において、ビルマ語は日朝語とともに「《アルタイ》系」に分類することができる。

5. ビルマ語と日本語の結果複合動詞

日本語の結果構文には、前節まで見てきた S-O-AP-V 結果構文のほかに、結果複合動詞がある。日本語では二つの動詞を組み合わせて形成される複合動詞が用いられるが、この形式は基本的にはヨーロッパ言語には見られない。

(25) 日本語の複合動詞 (影山 1996: 207)

- a. 押し開ける、揺り起す
- b. *push-open, *shake-awake,

日本語と同様、ビルマ語においても動詞を複合させる構文（動詞連結構文）が広く用いられる。

(26) ビルマ語の動詞連結構文 (加藤 1998)

- a. lai? 《つき従う》 + la 《来る》 → lai?-la 《ついて来る》
- b. we 《買う》 + sa: 《食べる》 → we-sa: 《買って食べる》

日本語とビルマ語とでは、結果複合動詞に関しても S-O-AP-V 結果構文と同様にほぼ同一のふるまいを見せるのだろうか。以下では、英語の結果構文とそれに対応する日本語の結果複合動詞をあげ、それがビルマ語においても結果複合動詞（動詞連結構文）の形で表わされるか検討する。Washio の類型はおもに S-O-AP-V 結果構文を対象としたものである。ここでは、作業仮説として Washio の類型が結果複合動詞についても説明力を持つ可能性があるものとして、Washio (1997) の結果構文の分類に従い日英語とビルマ語を比較する。

まず、Weak Resultative の例を見てみよう。

- (27) a. John pushed the door open
 b. ジョンはドアを押し開けた。
 c. John-ga. dāga:-go tun:-phwin.-del
 John-NOM door-ACC push-open-IND

- (28) a. John kicked the door open.
 b. ジョンはドアを蹴り開けた。
 c. John-ga. dāga:-go kan-phwin.-del
 John-NOM door-ACC kick-open-IND

日本語において、「ドアを押す」、「ドアを蹴る」、という動詞句は、「ドアが開く」という結果状態への変化を必ずしも含意しないが、「ドアが開く」という変化の方向性は含意していると考えられる。そのため、これらは **Weak Resultative** の結果構文となり、**Washio** の類型によれば日本語では可能な結果構文となる。そして、(27, 28b) に対応するビルマ語の文 (27, 28c) は予測通り容認される。

つぎに **Strong Resultative** の例を見てみよう。

- (29) a. John broke the door open.
 b. *ジョンはドアを壊し開けた
 c. ^{ok}John-ga. dāga:-go phyεʔ-phwin.-del
 John-NOM door-ACC break-open-IND

日本語の動詞句「ドアを壊す」と「ドアが開く」ことには必然的因果関係はないと考えられ、この例は **Strong Resultative** となる。**Washio** の類型では **Strong Resultative** は日本語では不適格であり、(29b) は予測通り容認されない。ここまで見ると、日本語においては、**Weak Resultative** を容認し **Strong Resultative** を容認しないという **Washio** の類型が **S-O-V-AP** 結果構文に限らず、日本語の結果複合動詞においても認められるといえる。しかし、日本語とビルマ語は **Washio** の類型で同じ「《アルタイ》系」に属し結果構文に関して同じふるまいをするとの予測に反して、(29b) で日本語の結果複合動詞が容認されないのに対し、対応するビルマ語 (29c) は容認可能である。

これにはさまざまな要因が考えられるが、S-O-AP-V 結果構文と結果複合動詞では異なるメカニズムは働いているか、もしくは日本語とビルマ語において、複合動詞（動詞連結構文）形成に関する制約が異なっているということも考えられる。日本語とビルマ語の広範な資料を対象としたさらなる研究が必要である。

6. まとめ

本稿では、まずビルマ語の文法構造を概観し、日英語（および朝鮮語）との共通点・相違点を示した。さらに、日英語の結果構文とビルマ語の対応する文を比較し、ビルマ語において結果構文として認定できる形式を提示し、その適格性を考察した。それにより、S-O-AP-V 結果構文では日本語とビルマ語は *Weak Resultative* と *Spurious Resultative* を容認し *Strong Resultative* を容認しないという点でほぼ同様のふるまいを見せることを示し、これにより *Washio* の類型において、ビルマ語は日朝語とともに「《アルタイ》系」に属することを提案した。また、日本語の結果複合動詞と対応するビルマ語の動詞連結構文では適格性が異なる場合がありうることを示した。

しかし、本研究は考察の対象が日英語の結果構文に対応する翻訳によるビルマ語に限定されている。今後は、実例を含めた広範な言語資料を対象に研究を進める必要がある。また、ここでは結果複合動詞については豊富な資料に基づく十分な議論ができなかった。今後は、結果構文に限らず日本語とビルマ語の動詞複合（動詞連結構文）に関する制約についても研究をすすめて、それを踏まえてさらに結果複合動詞についても調査研究を進める必要がある。

ビルマ語はシナ・チベット語族に属しているが、結果述語を主に動詞複合で表わす中国語との関係も考察しなければならない。また、本稿では *Washio* の類型で日朝語およびビルマ語は「《アルタイ》系」に分類されたとしたが、いわゆる「アルタイ語族」に分類されるモンゴル語やトルコ語、および、系統的關係は全く不明ながら言語類型論的に共通点が多いと思われるタミル語などとの比較によって、*Washio* の類型に諸言語のどのようなパラメータが関わっているのか明らかにする道も開かれると考える。

付記

ビルマ語の表記は基本的に加藤（1998）の発音表記方式に従うが、一部改変した。
Language consultant として Ma Hay Mar 先生の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

注

- (1) 鷺尾（1997）は、「言語学の伝統においては、「比較言語学」あるいは「比較文法」という用語は、もっぱら歴史言語学の研究分野を指す専門用語として用いられ、諸言語の共時的な比較研究は「対照言語学」（Contrastive Linguistics）などと呼ばれるが、最近の共時的比較研究は、「対照」というニュアンスでは捉えきれない抽象度・厳密性を備えており、「比較」と呼ぶにふさわしい。（鷺尾 1997: 103）」としている。これに従い、本稿はビルマ語と日英語の「共時的」比較であるが、単なる「対照」にとどまらず諸言語間の相違や言語の普遍的特性を明らかにすることをめざす研究プロジェクトの一環であるため、「対照」ではなく「比較」という用語を用いる。
- (2) たとえば、アリエスティアニ（2012）はそのような研究の一つであろう。
- (3) 根本（2014）によれば、ミャンマー連邦共和国においては 1983 年以来人口調査が行われておらず、それ以降は推測統計による数字しか利用できない。2011 年現在、国際通貨基金 (IMF) による人口の推計値は 6242 万人である。また、2014 年に 31 年ぶりの人口調査が実施される予定である（根本 2014: 12）。
- (4) 繰り返しになるが、ビルマ語では動詞と形容詞の区別は自明ではないので、ここで「形容詞」として扱っている品詞は、ビルマ語では「性質や状態などを表す動詞類」を指すと考えられる。
- (5) 角田（2009）では、語順に関して日本語と同じものを「+」で、異なるものを「-」で表しているが、ビルマ語の形容詞と名詞の項目は「+ (?)」と記載されている。
- (6) ビルマ語の動詞類の名詞化の方法として、動詞類に名詞化接辞を付加する方法 (?a-V)、動詞類を重複させる方法 (V→VV) などがある。
- (7) しかしながら、当然、Washio の類型の「ゲルマン系」や「ロマンス系」のグループに、それぞれゲルマン語やロマンス語以外の言語が分類される可能性はある。
- (8) 「アルタイ語的特徴」として、述語が文末に来ること、いわゆる膠着語であること、母音調和があることなどがあげられる。
- (9) ビルマ語において、動詞類の重複形が副詞的に働く。しかし、「副詞」というカテゴリーが存在するかは自明ではない。
(例) V→VV: myan (速い) →myan-myan (速く), ni (赤い) →ni-ni (赤く)

参考文献

- アリエスティアニ・ワハユ・ペルウィタ・サリ（2012）「インドネシア語の結果構文—日本語の結果構文・英語の結果構文との比較から—」（『学習院大学大学院 日本語日本文学』第 8 号, 76-58 (xlvii-lxv), 学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻, 東京.)
- 大野徹（1996）『新装版 現代ビルマ語入門』泰流社, 東京.
- 岡野賢二（2007）『現代ビルマ（ミャンマー）語文法』国際語学社, 東京.
- 小野尚之編（2009）『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房, 東京.
- 影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版, 東京.
- 影山太郎（2009）「語彙情報と結果述語のタイポロジー」（小野尚之編（2009）『結果構文のタイポロジー』101-140, ひつじ書房, 東京.)
- 加藤昌彦^{あつひこ}（1998）『エクスプレス ビルマ語』（『CD エクスプレス ビルマ語』（2004）として再刊）
- 斉木美知世・鷺尾龍一（2009）「言語の類型と結果表現の類型」（小野尚之編（2009）『結果構文のタイポロジー』43-99, ひつじ書房, 東京.)

- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版: 言語類型論から見た日本語』くろしお出版, 東京.
- 根本敬 (2014) 『物語 ビルマの歴史』中公新書, 中央公論新社, 東京.
- 藪史郎 (1992) 「ビルマ語」(亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典 第3巻 世界言語編(下-1)』567-610, 三省堂, 東京.)
- 藪史郎 (2009) 「ビルマ語」(梶茂樹・中島由美・林徹編『事典 世界のことば 141』178-181, 大修館書店, 東京.)
- 鷺尾龍一 (1997) 「第I部 他動性とヴォイスの体系」(中右実編, 鷺尾龍一・三原健一著『日英語比較選書7 ヴォイスとアスペクト』研究社出版, 東京.)
- 鷺尾龍一 (近刊) 「対照言語学からの接近: 結果表現をめぐって」(野間秀樹編『韓国語教育論 講座III』1-17, くろしお出版, 東京.)
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Washio, Ryuichi (1997) "Resultatives, compositionality and language variation." *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

辞書

- 大野徹 (2000) 『ビルマ (ミャンマー) 語辞典』大学書林, 東京.
- 原田正春・大野徹 (1979) 『ビルマ語辞典』日本ビルマ文化協会, 大阪 (1990 再刊).
- Cunningham, Nance and Aung Soe Min (2009) *Burmese-English English-Burmese Dictionary*, Paiboon Publishing, Bangkok.
- Myanmar Language Commission (1993) *Myanmar-English Dictionary*, Myanmar Language Commission, Yangon.

凡例

ACC	accusative (対格)
DAT	dative (与格)
DIM	diminutive (指小辞)
IMP	imperative mood (命令法)
IND	indicative mood (叙実法)
NEG	negative (否定辞)
NOM	nominative (主格)
NOM.AFF	nominalizing affix (名詞化接辞)
PL	plural (複数)
REL	relative (関係詞)
SUB	subjunctive mood (叙想法)